第4期

ネパールへの支援活動

インドの北にちょこんと帽子のように乗っかっている国ネパール。その緯度は沖縄と同位置で亜熱帯に属していますが、北に標高8,000メートル級のヒマラヤの山々を戴いているため、標高差が大きく、気候はその違いに大きく左右されます。またネパールは、その領土の東・西・南をインドに囲まれ、ヒマラヤの北には中国のチベット自治区が広がっています。このため、好むと好まざるとにかかわらず、文化、政治、経済面等でこの両大国の影響を受けざるを得ない状況に置かれています。

《現在のネパール事情》（2002年12月現在）

●ネパール王国

1．面積：14.7万km²
2．人口：2,321万人（2001年・国勢調査）
3．首都：カトマンズ
4．民族：リンブー、ライ、タマン、ネワール、グルン、マガル、タカリー等
5．言語：ネパール語
6．宗教：ヒンドゥー教（国教）
7．政体：立憲君主制
8．主要産業：農業、カーペット、既製服、観光
9．GDP：63.2億ドル（2001／02年・政府経済調査）
10．一人当たりGDP：約240ドル（2001／02年・政府経済調査）
11．主要援助国：（1997年）（1）日本　（2）デンマーク　（3）イギリス　（4）ドイツ　（5）アメリカ
12．在留邦人数：405人
（2002年10月1日現在・在ネパール日本大使館）
13．在日人数ネパール人数：4,081人
（2001年12月末現在・在留外国人統計）

《当時のネパール事情》

1．面積：14.1万km²
2．人口：2,109万人（1993年・国連推計）
3．GNP：31.7億ドル（1993年・世界銀行統計）
4．一人当たりGNP：約160ドル

カトマンズにあるOTTC（東洋医学専門学校）の実習風景（1994年9月）

〔1〕「ティテパティよもぎの会」への支援に至る経過

麗澤海外開発協会は、1978年９月、中米コスタリカ共和国に現地法人レイタク・コスタリカ株式会社を設立、国際協力事業団の融資を得て「花卉栽培試験事業」を実施し、協会の設立目的である「対外経済協力および技術援助」に貢献してきました。しかし、1991年をもって、コスタリカでの事業は終了しました。

コスタリカでは、コスタリカ国内に株式会社を設立し、日本から駐在員を派遣して会社を運営してまいりました。我々日本人がコスタリカ国内で花卉栽培事業を成功させたことにより、その成果と可能性をコスタリカの人々に伝えることに成功しました。しかし、企業を経営するには優秀な人材が必要不可欠であり、そのような人材をコスタリカで育成するにはいたりませんでした。

OTTCの日本語授業風景（1994年９月）

そこで「寄付行為」に則って新たな事業を実施するため、1992年10月１日付で「事業計画検討委員会」を設置しました。委員会による発展途上国に関する調査が、タイ、ラオス、ネパールにおいて実施され、これらの調査の結果、ネパールで活動する「ティテパティよもぎの会」が実施するプロジェクトへの支援が、協会の事業としてふさわしく、有望性があるとの合意を得ました。

協会の活動は、このネパールへの支援を機に、「直接支援」から「間接支援」へと移行していきます。

〔2〕支援の内容

もぐさの原料となるネパール原生のよもぎ

乾季にとりこみ、もぐさを作るのは生徒たちの仕事

棒状にした灸（棒灸）

① 専門家の現地での指導に関する渡航費用・滞在費の支援。

② 研修生の受け入れ事業。
現地ネパール人スタッフを定期的に日本へ招聘（しょうへい）し、必要な技術の研修を受けさせる。

③ 技術者の派遣事業。
現地で畑美奈栄さんが行う事業をアシストできる人材を派遣する。

④ 日本からのスタディツアーの実施。

1）これまでの主な支援活動

1992年
- ネパールの東洋医学専門学校（OTTC）視察。支援活動内容を検討。

1993年
- 畑美奈栄さんを専門家として派遣する。
- ラムマニ・カティワダ氏を滋賀県のもぐさメーカー（株）山正への第1期研修生として日本へ招聘する。

1994年
- イスワル・ラズ・バラミ氏を第2期研修生として（株）山正へ招聘する。

1995年
- ネパール東洋医学専門学校の校舎増設を支援。
- 4階建校舎が完成する。
- 国際協力事業団へ「ティテパティよもぎの会」へのシニア協力隊員を要請し、認可される。

1996年
- ネパール東洋医学専門学校の第1回卒業式が行われる。廣池幹堂会長の代理として、木下廣太郎氏が出席。卒業生に「モラロジー賞」を授与する。

1997年
- イスワル・ラズ・バラミ氏を国内鍼灸院の研修生として日本へ招聘する。

1998年
- 麗澤大学外国語学部日本語学科卒業生・田中靖子を現地事務局スタッフとしてネパールへ派遣する。

- サヌ・ナニ・バラミ氏を国内鍼灸院への研修生として日本へ招聘する。

2000年
- ティテパティよもぎの会代表・畑美奈栄さんが第28回「医療功労賞海外部門・厚生大臣賞」を受賞する。廣池学園れいたくキャンパスプラザで受賞祝賀会を開催する。
- カジェンドラ・ビクラム・スヌワル氏を日本へ招聘。手技療法治療院で研修を受ける。

2001年
- ビシャール・シュレスタ氏を日本へ招聘。手技療法治療院で研修を受ける。
- イスワル・バラミ氏およびデネッシュマン・ラケ氏を日本に招聘。もぐさ製造に関する技術研修を受ける。

OTTCの授業風景（1994年３月）

〔3〕「ティテパティよもぎの会」の活動

１）「ティテパティよもぎの会」とは

「ティテパティよもぎの会」は、鍼灸師・畑美奈栄さんが中心となってネパールに東洋療法である鍼灸・指圧治療を普及し、ネパール人の健康回復に寄与するために、1992年（平成４年）に設立されたNGOです。

ネパールのヒマラヤの麓をトレッキング中に病気になり、近くの村で手厚い看護を受けた一人の日本女性が、その下山途中、高熱によって衰弱していることが人目でわかる幼児を抱えた母親に会いました。ところが、その日本人女性は、母親の訴えるような、すがりつくような必死の思いをこめたそのまなざしを、早く日本へ帰国したい一心で振り切って立ち去ります。

しかし彼女は、自分が見知らぬ土地で親身の看護を受けながら、あの母子を見捨ててしまったという思いが、帰国後も日を追って強くなり、次第に「医療設備が極端に不足し、病気に苦しむ人の多いネパールに、十本の指とわずかな消耗品だけで治療のできる鍼灸で恩返しをしたい」と思うようになりました。

やがて彼女は、当時の職を捨て、40代半ばで鍼灸学校に入

ＯＴＴＣ（東洋医学専門学校）の前に立つ畑美奈栄さん（1994年９月）

ネパールで好評のよもぎパンとあんぱん

学、卒業して鍼灸師の資格を取得し、単身でネパールに渡って、カトマンズで治療活動を始めます。さらに、より広く深く人々の間に入り込めるよう、無料奉仕による治療の傍ら、地元大学の語学科に入学して、ネパール語を習い始めました。その情熱と活動が次第に現地の評判と信頼を得、また、病気の80%以上が鍼灸によって治癒または症状緩和に有効ということが理解されるようになりました。しかし、たった一人での努力では限界があり、年齢的にも長期間の継続は無理と考え、彼女は現地のネパール人鍼灸師の養成を考えます。

そこへ、彼女の活動と鍼灸治療効果を認めたネパール赤十字カトマンズ支部の幹部から、赤十字の敷地提供の提案がありました。こうして、彼女の夢であった鍼灸技術者養成学校（OTTC・東洋医学専門学校）の建設と運営が、次第に具体化されていきました。そして、この女性、畑美奈栄の知人を中心に、彼女の活動に賛同する人々が集まり、彼女の活動の資金援助を目的とした「ティテパティよもぎの会」が1992年６月に発足しました。

２）主な活動内容

①第１期プロジェクト

OTTC（Oriental Treatment cum Training Centre・東洋医学専門学校）の設立

OTTCは、ネパール人生徒に東洋医学の鍼灸、マッサージの技術と、西洋医学の基礎知識、日本語などの語学など、さまざまな知識を教える学校です。また、併設の治療院での実習や、近郊の農村などへの巡回治療奉仕、治療に使うもぐさづくりなど、経験を積むための実践の場も豊富にあり、ここに通う生徒たちは３年間のカリキュラムのなかで、さまざまなことを学びながら、自分たちの将来のための基礎づくりをしていきます。

ヘルスキャンプを手伝ってくれたボランティア鍼灸師（パタン市）

OTTCの活動と、東洋医学の効果は、ネパール国内でも大変な反響を得ており、ネパール政府要人をはじめ、さまざまな方がこの活動にご賛同いただいています。また、1997年７月、ネパール赤十字カトマンズ支部に運営を移行、ネパール人による自主独立をはたし、現在まで数多くの優秀な卒業生

をネパール国内に送り出しています。

② 第２期プロジェクト

ＡＭＡヘルスキャンプの実施

ティテパティよもぎの会は1997年、ネパール社会福祉省に登録され、国際ボランティア団体（INGO）として認可されました。そしてOTTC卒業生とともに無医村への無料巡回治療を、これまで約40回以上実施し、４万人以上の患者を治療しています。治療を受けた村と患者の多くから感謝され、再度の巡回治療実施の要望が数多く寄せられています。

朝まだ早いうちにカトマンズの事務所を出発し、巡回治療に行く先々では、現地ボランティアや地元住民が準備を行い、ヘルスキャンプ・スタッフが到着するころにはすでに村人が集まり、治療を待っています。患者さんの症状は多様なため、多岐にわたる鍼灸の知識が必要となります。そこで、現地鍼灸師に具体的な症例を示しながら実地研修を行い、フォローアップ教育をしています。また、ヘルスキャンプを行うにあたっては実施地区のボランティアと何度もミーティングを開き、アシスタントとして活動するボランティアに“もぐさ”についての講義やお灸のトレーニングも行っています。

治療の灸に使用するもぐさの100パーセントは、現在ネパールに自生するもぐさで、ネパール人によって作られたものを使っています。ネパールでは雑草として扱われていたよもぎを、医療品・医薬品として認識されるまでに高めることができました。ティテパティよもぎの会では、ネパールに自生するよもぎを使用したさまざまな製品の開発も行っています。

今後は中国、日本に次ぐ世界第３番目のもぐさ生産国にするべく、ネパール人に対するもぐさ製造技術の指導と鍼灸師育成に尽力していきたいと考え、現在、もぐさ工場兼クリニックの建設を検討しています。また、主だった産業の少ないネパールで、障害を持った人々や女性にも雇用の機会を与えることができないかとも考え、もぐさを使用した簡単な治療法のトレーニングを行ったり、出来上がったもぐさを日本に輸出することも計画しています。

ヘルスキャンプ（地方巡回治療）の様子
（カトマンズ市内、1998年５月）

第28回医療功労賞（海外部門）を受賞した畑美奈栄氏（2000年３月17日）

乾季にとりこんだ「もぐさ」を作るのは生徒たちの仕事

私のネパール体験記（2000年2月）

又吉 里子（麗澤大学ドイツ語学科　2000年３月卒業）

今回、卒業旅行にネパールを選んだ。ネパールに特別の思い入れがあったわけでもなければ、山が好きでトレッキング目的でもなかった。「卒業旅行はシベリア鉄道でヨーロッパまでユーラシア大陸を横断するぞ」と前々から豪語していたにもかかわらず、ささやかな夢は儚（はかな）く消え去る運命となった。お金が足りないことと同行者がいないという二つの理由が、私をネパールへと導いた。同じ寮の友人が去年の同じ時期にスタディツアーで訪れ、「またネパールに行きたい」と繰り返し言うのである。後輩も参加し、３人の「ネパール旅行軍団」が結成された。どこの機関も通していない、全くのプライベートな旅行が、実り多きスタディツアーになるとは、誰がその時に予想しただろう。まさに今回の旅行は最初から最後までハプニング付きの波瀾万丈の３週間であった。

３週間のうち１週間をヘルスキャンプに参加させていただいた。この１週間抜きには私たちの旅行は語れない。畑美奈栄先生と事務局長の木下廣太郎さんには迷惑をかけまくり、ヘルスキャンプ（地方巡回治療）で挽回するしかないと思い、どんな条件でも、どんな病気になっても這（は）ってでも１週間働こうと密かに心に誓った。ヘルスキャンプ中の私のキーワードは「もぐさ」であり、寝ても覚めても「どうしたらもぐさがうまく捻れるか」をずっとテーマにした。「もぐさ」と言われるとドキッとし、誰かうまい人とパートナーを組んでなどという甘い考えは通用しなかった。唯一救いなのは、急ぐことを知らないネパール人が辛抱強く、嫌がりもせず待っていることだった。私の駆け出しの「もぐさ」にはそのゆっくりさがちょうどよく、心地よかった。しかし、畑先生を見るとひっきりなしに来る患者さんに追われ、時には大声を張り上げて患者さんと言い合いもしている。のんびりしていられないと、自分にカツを入れて頑張った。毎日同じことをしていると、気持ちに余裕が生まれ、先生の見ていないところで

先生のふりをして、勝手に指示を出したこともあった。１日が終わって日記を書く頃になると、言葉だけでは言い表せず、大好きな日記を書くことさえおっくうになっていた。今思えば、すべてが楽しかった。ヘルスキャンプが終わり、ダマウリを離れるより、みんなと別れるのが辛かったほどである。すべて私の記憶のアルバムに収めた。今でも時々思い出しては余韻に浸っている。できることは限られていたが、それなりに十分すぎるほど得るものが大きかった。畑先生の頑張りを目の当たりにし、一週間を共にした私は「よもぎの会」のこれからの発展を心から願ってやまない。これからもなんらかの形で「よもぎの会」とかかわりを持たせていただこうと思う。またいつかネパールを訪れたらヘルスキャンプに参加したい。

ヘルスキャンプに参加して（2000年10月）

川崎　徹（東京医療福祉専門学校医療科本科１年）

今回、セティデビのヘルスキャンプに参加させていただくことができ、かつてない貴重な経験をしました。私事ですが、私は昨年末に19年間勤めた会社を退職し、鍼灸師を目指して今年４月から専門学校に通っています。直接自分の手を使って人の役に立ちたいという思いが転身のきっかけではありますが、果たして将来どのような治療家となるべきか暗中模索しておりました。そんな時、縁あってよもぎの会を知りヘルスキャンプに参加させていただく機会に恵まれたのでした。今回のヘルスキャンプで、私は実に多くのものを得ました。

第１は、私自身の進路に対する信念です。ヘルスキャンプに集まった大勢の患者さんに初めは圧倒され、初学者の私は戸惑うばかりでした。しかし日を重ねると今の自分にできる最善を尽くせばよいのだと腹が据わって、自信を持って１人ひとりの患者さんと向き合えるようになりました。そして多くの患者さんが鍼灸で回復していく様子、特にお灸で外傷が治っていくことなどを目の当たりにして、鍼灸治療の有効性

を確信することができました。またある日、再診で来たおばあさんが私の顔を覚えていてくれて、順番待ちの列の中から合掌して「ナマステ」と笑顔を送ってくれた時、私は過去味わったことのない熱い思いが込み上げてくるのを感じました。今回の体験を通して「自分はこの道を選んでよかった」という信念が得られたことが私にとって最大の収穫です。

第２に、スタッフ、ボランティアの人たちとの交流です。ヘルスキャンプを支える数多くの人たち、畑さん、木下さん、現地のボランティア、受け入れる側のセティデビの人たち、そして今回日本から参加した仲間たちと交流を持つことができたことは望外の喜びです。

＊畑さん、木下さんのご尽力には敬服するばかりです。

＊イスワルさんをはじめOTTCの卒業生、在校生の人たちの鍼灸治療に対するひた向きな姿勢は見ならわなければならないと思いました。

＊ルビンさんをはじめボランティアの人たちは、ベテランから初心者まで様々でしたが、みな熱心でかつ明るく、キャンプをしっかりサポートしてくれました。

＊セティデビの村の人たちは温かく迎えていただき、細やかな気配りをしてくださいました。ヘルスキャンプの終了日に皆さんからたくさんの花輪を懸けてもらったときの感激は忘れられません。

＊そして野村さん、加賀屋さん、村田さんにはお世話になりました。仲間に恵まれ、ヘルスキャンプを楽しくやり遂げることができました。

ヘルスキャンプを縁に多くの人と出会うことができました。きっと私の一生の宝となると思います。今後はこのつながりを広げていきたいと思います。まだまだ他にも書き尽くせぬほどのことを見聞きし、体験し、学びました。日本の我が家に戻ったときに妻が「何か変わった気がする」と言ったのは、きっと私の内面的成長を感じ取ったに違いないと私は理解しています。重ねて畑さん、お世話になった方々のご厚意にお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

私のネパール体験記（2002年1月）

坂井恒資（弘明堂治療院）

カトマンズ空港に着いてすぐ10人くらいのネパール人に囲まれ、日本語で「どこ行きますか？ 富士ホテルですか？ 畑さんですか？ 畑さんの車が来てます」と言われ、信じて車に乗ってみたものの、ちょっと危険を感じたので、すぐに降りた。空港オフィスで『電話を貸してくれ』と言ったら、この人も「畑さん知ってる、私かけてやる」と言う。到着早々、畑先生の有名なこと、皆から敬意を表されていることにビックリした。

翌朝、８時からロイヤルあんまセンターで、ボランティア向けに初歩の指圧講義をしたが、治療活動をしているベテラン勢の質問が多く、なかなか前へ進めなかった。皆の熱心な姿に驚かされた。

ヘルスキャンプへは朝６時半にホテルを出発……。真っ暗な中を10数人乗った軽トラックででこぼこの道を約30分間。灯もストーブも窓ガラスもない吹きさらしの牛小屋のような所で、わらのむしろと薄っぺらな敷布団のみで治療が始まった……。患者さんの病態は過労と冷えが原因の膝・腰の病気が最も多い。栄養失調からの喘息、腹痛、頚痛、生理痛……。そして怪我をしても近くに病院も薬局もないし、保険制度もなく、未処置のまま固まってしまった病気が多い。一番鍼で治る都会的な虚証の人は約１割で、第一次産業の山村生活者が多いので、五番から十番の鍼が合う。実証の人が９割くらい、ボランティアでもできる即効性のある透熱灸が大変役に立つ。そして何よりも寒い所なので灸頭鍼がたいへん重宝である。

また、畑先生考案の素焼きのヨーグルト用土器によるよもぎの保温器……。これはまさにTPOにかなった絶品であるということを、この場所に来て初めて知った。

治療が始まって約１時間、寒さが頂点に達した頃、あっつ～いチャイの差し入れがある。気血が巡り身体が温まり、一

気に元気が出てくる。また後半が始まる。11時にカトマンズへ戻ってカジェンドラ君のマッサージを受けた。日本から遠く離れたネパールで超一流の古典のマッサージに出会えるとは思ってもいなかった私は、その場で弟子入りすることに決めた。

１週間のキャンプで私は思った。20人もの若者がよくこんな大変な仕事をボランティアでやるものだ。免許のある人には技術の実践の場として役立つが、免許のない人はまさに奉仕の精神そのものでしかない……。将来この道に進めばきっと立派な治療師になるだろう、と思える人が何人かいた。

その他いろいろな考えの人が畑先生の情熱のエネルギーに引っぱられて動いているように感じた。すべてのスタッフを我が子のように思っている先生は、彼らの一語、一挙手一投足に至るまで厳しく叱る。その光景を目の当たりにして私は感動して涙してしまった。

次の計画としてのもぐさの工場も、「雑草でしかないよもぎを仕事のない山村の人に集めてもらい、それを細かく選り分けるのは、目の不自由な人や車椅子の人にでもできる。そして、もぐさとして使えない捨てる部分を利用して、よもぎ染め、よもぎソバ、よもぎもち、よもぎパン等を作ることは、学校に行けない文盲の人たちにでもできる」。こういったすべての考案の元に、「私がいなくなっても皆が自立して生きていけるようにしてあげたい」という母性愛そのものを見た。

今回私はこのキャンプに何の用意もせずポッと参加しただけで、奉仕活動からくる幸せをたくさん頂いてしまった。当日だけのことを考えても、何日も前から大勢のスタッフが準備をしてくれていたから私が治療をさせていただけたのだし、毎月１回のキャンプも恒例にするには、何年もの地味な努力と大変な苦労の積み重ねがあればこそではないか……と思い至るにあたり、私は恥ずかしくなってしまった。

畑先生、スタッフの皆さん……ありがとう。